沖縄国際大学社会文化研究　Vol. 10, No. 1　2007年３月

植民地都市と「疎外態」のリアリティ

—ポストコロニアリズムにおける都市社会学の理論構築に関する一試論—

桃　原　一　彦

Colonial cities and the reality of alienated condition

— An essay on the theory construction of post-colonial urban sociology —

Kazuhiko TOHBARU

わたしたちが話している言語は、わたしたちのものとなる以前に彼のものだ。…（中略）…わたしはその言葉をこしらえてもいないし、受け入れてもいない。わたしの声は、その言葉を追いつめないと話せない。わたしの魂は彼の言語の影でいらだっている［ジェームス・ジョイス、1964＝1979、『若い芸術家の肖像画』（丸谷才一訳）、新潮文庫、288頁］。

1．はじめに—本稿の試み—

昨年、筆者は沖縄国際大学南島文化研究所「第147回シマ研究会」[1]において「基地周辺市街地の空洞化と黙認『工作』地—白川フリーマーケットの展開から—」と題した報告を行なった。その口頭発表は、主として沖縄島中部の基地周辺市街地におけるインナーエリアの空洞化問題と、その社会的産物として嘉手納弾薬庫の軍用地敷地内を「不法占拠」状態で拡大展開した大店舗群、白川フリーマーケットという現象を空間的に連関させながら実態報告に重点をおいたものとなった[2]。つまり、白川フリマの存在から沖縄社会および沖縄の都市社会の諸問題を提起することに終始した報告内容であった。

しかし、その報告の経験をとおして、問題の提起方法が報告者（＝筆者）の理論的視座を曖昧にさせ、むしろ白川フリマに関わる一人ひとりを「都市問題」モデルだけに配置し、超越論的に個を疎外してしまう可能性があるのではないか、という「壁」に当たることを痛感させられた。そこで、この研究ノートは、「沖縄」をめぐる諸問題を取り扱う上での、筆者の理論的視座の構築に関する一試論にしておきたい。なぜなら「沖縄」をめぐる諸問題は理論的手続きを明確にし、認識論的および存在論的課題を整理しておかなければ、結局はその考察過程その

ものが対象を疎外しかねないということが挙げられるからだ。

そして、筆者は「沖縄」をめぐる諸問題を植民地主義研究とりわけポストコロニアリズムの理論的視座において構築しようという位置に立ち、筆者のプロパーでもある都市社会学との接合を試みようという意図のもとにいる。それは、植民地主義の渦中にある「沖縄」を対象化する必然的な帰結として、つねに自己批判的であらねばならないということに突き当たるからだ。上記の点を鑑み、この研究ノートを書き進める理由は以下のエドワード・サイードの言葉に触発されたからでもある。

コロニアリズム（＝帝国主義の帰結段階としての植民地主義）研究を展開したサイードによると、「帝国主義に対するナショナリストの抵抗は、その最良の段階では、つねに自己批判的であった」という［Said、1993＝2001：50］。なぜなら「つまり抵抗は、帝国文化によってすでに樹立された諸形式、あるいはすくなくとも帝国文化の影響をうけ、帝国文化にどっぷりつかった諸形式、それらを再発見し利用することを、どうしても余儀なくされるからだ」と言うのだ［Said、1993＝2001：35］。これは「もともと自己否定をおこなわなければ自己肯定できぬ」［竹内、1978：29］という逆説的な命題をもつ実存主義の立場でもある。そして、この姿勢を論理展開のなかでつねに一貫して意識していかない限り、抵抗が新たな対立と暴力の諸形式（二項対立図式など帝国主義の諸形式）を植民地内部に向けて再生産してしまう可能性があるのだ。

筆者がこの世に生まれどっぷりと浸かってきた諸形式は日本語である。そして今日社会学者として沖縄社会を記述表象しようとするときのテクニカル・タームは、日本語で修得した都市社会学のそれである。F.ファノンやJ.P.サルトルのマルクス主義的弁証法によって痛烈に批判されたあの態度、他者を超越する科学的・分析的理性だと批判されたあの態度、すなわち筆者が白川フリマ、沖縄の都市社会、そして沖縄そのものに対してとったダブル・スタンダードな態度（植民地主義に関する都市社会学の理論的枠組みへの収斂）とは、まさに植民地暴力の隠蔽をともなった他者の物質化、および疎外行為でしかない。

そこで本稿の構成は次のとおりとなる。筆者がフィールドワークとして展開してきた米軍基地周辺都市の空洞化と白川フリーマーケットの問題も念頭におきながら、曖昧模糊でしかなかった「沖縄」をめぐる諸問題と都市社会学との接点に関する理論的視座を、要約的（試論的）ではあるが明示しておく。そして、コロニアリズム研究と都市社会学とのあいだには、現象学的社会学における差別論の視座、また空間論や表象に関わる記号論の視座、そして社会諸科学の最重要課題、すなわち「主体」と「他者」という認識／実存の問題が介在してくる。そして、本稿で主要なキー概念となるのが「疎外」や「物質化」という他者化に関わる問題である。

2．植民地における文化装置としての都市空間と「疎外態」

植民地主義研究と都市社会学との接合を図り、「沖縄」をめぐる諸問題を扱おうというとき、そこには大前提となる視座がある。すなわち、沖縄社会を「植民地」、および沖縄の都市社会を「植民地都市」として捉えるということだ。しかし、まず一方の極にあるポストコロニアリズムについてであるが、その理論や方法論の枠組みといってもかなり広範で学際的であり、「主体」と「他者」という認識／実存にかかわる問題から「語りの政治性（ポジショナリティ）」の問題まで多岐にわたる。よって、その理論的、方法論的検討は紙幅の関係上別稿に委ねることとし、ここではその筆者の視座と立場の基本枠組みの紹介にとどめておきたい。

まず、本稿で沖縄の都市社会を「植民地都市」と捉える場合、以下のような視座にたつことを確認しておきたい。すなわち、国民国家との関係における政治的領域での差別、経済領域における格差構造、そして文化的領域（とりわけ言語）を原基とした劣等コンプレックスなどの位相が複合するなかで、軍事基地の過重負担と抱き合わせに個に対する「疎外」や「物質化」が効率よく空間システム化した現象として都市空間を捉えるという立場である。

この説明のままではかなり煩雑で要点が不明瞭であり、本稿の意図が読み取りにくいものとなってしまう。よって、以下に３点ほど説明を加えておきたい。

(1)「疎外」「物質化」

「疎外」「物質化」という概念を使用する以上、本稿の理論的視座にマルクス主義の分析道具が持ち込まれていることは察しがつくであろう。しかし、ここで使用する両概念は必ずしも生産様式、その所有量や生産関係などの帰結段階に絞られるものではない。押しなべて、マルクス主義都市社会学の主要概念である「集団的消費」の様式を含めるように、経済過程とその空間的配置との関連性だけに閉じたものではない。また、本稿の視座に言語をはじめたとした文化領域や劣等コンプレックスの歴史的蓄積の問題を含めているが、これはたんに経済過程（下部構造）による社会意識（上部構造）への上向的な作用という位置づけではない。

ここで使用するところの文化領域および身体感覚の領域とは、「他者」に関するあらゆる認識道具の根源、またその「反応」（「無反応」という反応も含めた）に関する外的表現である。そして、具体的で個別的な日常の個の表現様式に、ある一定の全体性を感知させる領域も文化様式と身体秩序である。すなわち、個に潜在する「社会」の抽象的な全体をとらえるうえで、社会と個を媒介する文化様式や身体秩序へのまなざしは不可欠である。社会学者アーヴィング・ゴフマンが日々の何気ない身体動作（会話のやり取り、身振り、手振り、しぐさなど）に社会的形式・図式（身体技法）を発見しようとしたように、具体的で個別的な日常は文化様式や身体秩序を介して社会に関する抽象的な全体を構成する。さらに社会に関する全体は、文化様式

や身体秩序を介して雑多な具体的日常を技法として統制する［竹内、1978：92－95］。

そこで、本稿で使用する「疎外」「物質化」とは、他者を「とらえる」行為や身体的感知、あるいは他者として「とらえられる」行為や身体的感知、つまり日常における相互関係上の技法の問題として扱っていきたい。この「疎外」「物質化」の概念は、竹内芳郎による以下の説明から示唆を得ている。やや長くなるが、本稿の理論的視座にとって重要なキー概念であるため、そのまま引用する。

> サルトルの言葉を藉りれば、「歴史が私の手をまぬがれてしまうのは、私が歴史をつくらないからではない、他人もまた歴史をつくるからである。」けれども、私のほかに他者がいるというだけでは、本当は十分ではない。私と異なる他者たちの実践を吸収し保存する物質が媒体となって、それが私の実践を制約し、妨げ、ねじまげるのでなければならない。…（中略）…物質が私によってでなく他者たちによって附与された意味を保存して私のまえに厳然として立ちはだかり、私が附与した意味さえもその物質のなかでまったく別の意味にすり替えられて保存されてしまうということがおこるとき、そのときにこそ＜疎外＞という現象がおこるのである［竹内、1978：110］。

この竹内の説明で要点となるのは、「わたし」という身体で感知され認知されるあらゆる図式を惰性化し、個の実践性を吸収し、制約しようとする「物質化」という現象である。しかしさらに重要な点は、この物質要素を介して社会的な図式をもたらす間―身体的な関係に、非対称性や不均衡性が所在するところへの着目である。この間―身体的関係の非対称性や不均衡のうえに、マイノリティという他者化（疎外）の作用と、「わたし」の非在性という経験が構造化する結節点がある。すなわち、思惟し、語る主体ではなく、思惟され、語られ、捻じ曲げられ、客体に貶められる日常的でアクティヴな過程の構造化こそが＜疎外＞という社会的経験なのである。つまり、それは「わたし」という実践がつねに不均衡的に非在化する経験なのだ［郭、2006：51－53］[3]。

社会学の伝統的なスタイルからすれば、権力論および身体権力論的な視点といっていいかもしれない。植民地主義研究においては、政治的、経済的な差別・暴力の「構造」を永続的かつ効率よく稼動させるための文化および身体技法の支配に関する視点が必要である。よって「疎外態」としての個の行動様式や表現様式から、その支配の諸形式を解読していくことが要請される所以はここにある。なぜなら、それは「他者」に関する認識と感知の道具を提供する領域の支配に直結するからである。とりわけ、植民地における被植民者の「他者化」あるいは「疎外」「物質化」の日常的なシステムは、認識・感知を社会的に説明するための根源的道具、すなわち言語を破壊することで効率よく構築される。被植民者という個の行動様式や表現様式に

みられる（日本語も含めた）物質要素との緊張状態やジレンマは、かれらが被る「疎外」「物質化」という経験のリアリティを捉えるうえで重要である。それは、ある意味「社会」（ここではポストコロニアルな社会）のリアリティでもある。

(2) 物質化的文化装置としての都市空間

次に２点目として、都市空間を権力論的に「疎外」「物質化」のシステムとして捉えるということに関するものである。これは１点目と関わるのだが、植民地都市の諸空間は物理的に、そして文化的（および象徴支配的）にも「破壊」や「書き換え」行為が行なわれるところである。それは被植民者個々の経済過程や生活構造に根源的で急造的な転換を強制する。だが、それにとどまらず他者および自己という実在との社会的分離、社会的分節化の図式が文化として、および身体秩序として書き込まれることでもある。

しかし、強権的で暴力的な分節図式の書き込み行為の段階、すなわち「あからさまな植民地主義」の支配形式の段階において、今日の被植民者に関する「疎外」「物質化」について言及することは不十分である。なぜなら、今日のようにメディアなどの文化装置を媒介にしてマイノリティを「良心的かつソフトに」表象してしまう行為が蔓延るように、支配の諸形式が記号や意味の脚色などにおいて複雑かつ巧妙となったからだ。つまり「終わらざるコロニアリズム」という意味で今日はポストコロニアリズムの状況にある。まさしく「一般の意識においては過去とみなされていながら現代のわれわれの社会性や意識を深く規定している構造」が支配の諸形式として生き永らえている［鵜飼、1998：42］。あるいは「根底では不公正で搾取的な政治的関係が表面上では無意識的に受け入れている状態」という意味で、ソフトコロニアリズムの只中にあるのだ［Hamamoto、『琉球新報』（2005年１月10日・朝刊）］。

Post - であろうと Soft - だろうと、今日の植民地主義研究においては支配／表象する側としての「主体」と、被支配／表象対象としての「他者」との分節境界が前意識的に埋没する文化的な権力装置に着目しなければならない。また、文化という装置をとおして植民地主義の実践をみていくばあい、自己が「疎外」「物質化」されていることに対して「察しよく無関心を装う」（tactful inattention）行動選択や、首尾よく身体秩序化された「儀礼的無関心」（civil inattention）への昇華もとらえなくてはならない。ポストコロニアルな視点においては、抵抗の余地を奪うほどに、支配形式を自明なものとする（支配を儀礼的に正当化する）オートマチックでエコノミーなシステムに着目する必要があるといえよう。

そこで、本稿では沖縄の都市社会における権力作用を植民地主義的支配形式に読み替え、「疎外」「物質化」という他者化の過程、および被植民状態（被支配の形式）を儀礼化する物質的要素として都市空間がはたす作用に着目していく。都市空間の権力作用については、シャロン・ズーキンの「見える都市・見えない都市」という空間現象論を踏襲し、さらにケヴィン・リン

チがいう空間認識の諸要素（node＝結節点、landmark＝目印、path＝道筋、edge＝境界、district＝地区）と絡めた町村敬志と西澤晃彦の権力論は明快である［町村＝西澤、2000：270－283］。町村と西澤は、空間への権力作用として「名前をつける」（命名化）、「徴をつける」（象徴・表象化）、「境界によって分ける」（分節・分断化）に整理した。つまり、物流の結節、人々の滞留、街路、区画線など、個にとっての外在的な物質要素が空間の認識様式として身体に書き込まれ、そしてその認識様式そのものが図式として個を拘束、固定化する。

さらに、この身体図式が他者との空間的距離（間－身体関係）を規定しながら分節線として作用し、この図式のなかで他者を物質化（非在化）しようとする。あからさまな植民地主義段階における都市空間の「破壊」「書き換え」は、被植民者の言語を圧殺しながら個に対して図式化の暴力を強制する。だが、ポストコロニアリズムの段階においては、「破壊」「書き換え」が文化的な遺産（legacy＝「遺恨」とも言える）となってソフトに身体秩序を図式化する。よって、本稿で使用する「空間」概念は、たんに個に外在する地理的・物理的現象を指すだけではなく、きわめて内在的、身体的なものなのである。

そうなると、空間の構成諸要素たる結節点、目印、道筋、境界、地区の指標は、地理的・物理的な意味での外在的なものばかりではなくなる。そこには、一定の位置に固定化・惰性化（物質化）された他者、つまり物質的他者の物質的身体そのもの（あるいはその距離）が空間の惰性的な要素となるのだ。固定化・惰性化（物質化）された他者とは「あなた」「かれ」ではなく、すなわち「あいつら」「かれら」という個の非在化した身体の集合である。または、「間－身体性の空間」と言ってもよいだろう。この内在的で固定的な身体距離にもとづく空間が、外在的で地理的・物理的空間へと現象化し、組織化・制度化するとき、当該社会における集合体相互の関係はきわめて残忍で野蛮な暴力となる。そして、ポストコロニアリズム的実践が稼動する社会の文化装置とは、この残虐で野蛮な空間の暴力を隠蔽、忘却しようとし、この間－身体的な集合の分節化を自然で儀礼的な身体秩序とするよう惰性化へと働きかける。

もちろん、上記の諸現象は植民地都市に限られたことではないだろう。空間を「物的要素」として、つまり都市と社会構造との結節点としてとらえ個の配置・管理、そして階級と都市社会運動の問題を理論化しようと試みたマニュエル・カステルらのマルクス主義都市社会学は確かに示唆に富む［カステル、1977＝1982：109－110］。カステルらの理論的背景には、人間生態学からアーバニズム論（大衆社会論）へ、そしてソーシャルワーカーからテクノクラートへと収斂したアメリカ都市社会学に対する批判的止揚があったことも確かだ。しかし「人種中心主義の傾向の強い社会組織のテキスト」的なイデオロギーとしてアメリカ都市社会学を批判しようとも、やはり所詮マルクス主義都市社会学がヨーロッパという帝国主義的土壌で萌芽をみせたことは無視できない［カステル、1977＝1982：102］。なぜなら、かれらの理論的視座からは都市プロレタリアと社会運動の問題が輪郭を現すことはあっても、パリの後背地としてのア

ルジェリアやマグレブ人（およびその物質的・文化的収奪とその再配置）が紡ぎ出されることはほとんどないのだ[4]。

たんに都市社会学的理論化の枠組みではなく、ポストコロニアル時代における都市論としての社会学的解析はどのようにして可能となるのか。本稿はその試みの端緒として、植民地主義という差別、暴力と対峙する突破口としてのキー概念「疎外」「物質化」に着目しているのである。よって、分析的理性に基づくものではない。文化的な「破壊」「書き換え」に端を発する植民地主義的形式の社会においては、より苛烈に、しかし暴力性を隠蔽するという意味ではより残酷に「疎外」と「物質化」が進行する。本稿における理論構築の目論見には、個への着目に併せて歴史の奪還があり、「空間からの解放／空間への解放」が大前提としてあるのだ[若林、1996：13‐14]。植民地都市の空間が擁する効力と、その文化装置との相乗効果を見ていくことは、植民地主義研究と都市社会学との理論的接合過程においてきわめて重要であると考える。

(3) 植民地主義研究と＜現れ＞の実践的記述

そして、ここでさらに根本的な問題に到達する。それは、とくに筆者の理論的視座に対する多方面からの反論として容易に想像がつくものである。たとえば「沖縄の都市空間あるいは社会をそのような側面だけで捉えていいのか」という、分析的理性に基づく反論が主となるであろう。

また、考えうる批判として、本稿の試みが「偏った政治的立場に立つもの」とみなされ、「民族主義（ナショナリズム）」だとか、はては「土着主義（ネイティヴィズム）」として扱われていくことも可能性として否定できない。しかし、ナショナリズムだろうがネイティヴィズムだろうが、そのような処置の仕方は概念整理をしないままのまったく初歩的な知的怠慢であって、イデオロギー的発話でしかない。

サイードは、はっきりとネイティヴィズムに内在する暴力性を拒否しているが、脱植民地主義のプロセス上、ナショナリズムの可能性は否定できないことを示唆している［Said、1993＝2001、66－73］。よって、ナショナリズムとネイティズムを安易に混同して使用することは、次のような陳腐なコロニアリズム思想の体系化を引き起こしかねない。すなわち、植民地主義研究においては「植民者」と「被植民者」をまずは概念上特定するところから始めなければならないはずだが、それをすぐさま「二項対立主義だ」「本質主義だ」「排除の論理だ」などと混同し集列化するという誤読である。「植民者－被植民者」とは、被植民者にとってはたんなる社会的構築物ではなく、むしろはじめから「直感」されるものなのだ。よって、そこに起ち現れる本質主義的態度は、差別という暴力に根ざした、その暴力の本質に対する「直感」なのである。よって、とりわけ植民者（差別を行使する者）の側が本質主義的態度を構築論において

分析的に批判するならば、それは（自らも含めた実存としての）差別という暴力を隠蔽する可能性がある［郭、2006：55］。

よって、自己の言辞（とくに支配言語による言辞）も含めた脱構築過程を何ら経ようともせずに、いきなり「二項対立主義はダメだ」という言辞に固執している者は、自分自身がじつは本質主義的身体に囚われていることそのものを腑分けしなければならない。被植民者の「直感」に基づく本質主義的な態度を易々と超越し、被植民者のカウンセラーに化身しようとする帝国言語の科学における当為的転向性を暴露していく作業が必要であろう[5]。

シカゴ学派のソーシャルワーカー的方法がテクノクラート的態度へと化身した、まさにその（レイシズムに基づく）態度の本質を身体に内在する「社会制度」として暴露し、挑発した新都市社会学のカステルらが果たした功績は大きい。なぜなら、カステルはその批判的止揚を経て、シカゴ学派が王道としていたコミュニティ・モノグラフの方法論をアメリカで体得したからだ。P. L. バーガーが愛用していた暴露戦略のように、未だに感知されえぬ身体的（直感的）態度様式を社会学の本来着目すべき「社会制度」として暴露し、逆なでし、挑発することで、本質主義の暴力の連鎖を断ち切る可能性が見出せるかもしれない。分析的理性に基づく言辞の所有者だけが、被植民者の本質主義的態度を告発するような非対称性こそ、本質主義の暴力（および象徴暴力）の連鎖を生み出していたのだから。

だが、もちろん筆者自身がその暴力（および象徴暴力）の連鎖に加担する恐れはある。たとえば確かに「沖縄社会」であろうが「都市社会」だろうが、社会現象を一枚岩的に捉えることは不可能である。ましてや、特定の視座に立つ場合、それにもとづく類型化や概念化が逆説的に個を疎外、物質化、惰性化してしまうことはアカデミズムの世界において幾度となく目撃できる。

では、そのような象徴暴力の危険性を覚悟しながら、またできるだけ回避しながら社会的リアリティを捉えていこうとする場合、そのリアリティはどこに求めればよいのだろうか。ただ「ありのままに対象をとらえる」ということだけで解決するのだろうか。この難題は、植民地主義研究が政治的、認識論的自己批判から免れないという理由からだけではなく、社会科学そのものの方法論や倫理的責任にも直結している。

そこで、本稿が「疎外」「物質化」という概念にこだわる理由は以下のようにある。すなわち「わたし」が非在化しようとする実存的身体の経験の層（つまり直感）に社会現象のリアリティを捉える糸口があるのではないか。つまり、それはエドムント・フッサールをはじめとする現象学的社会学の問題とも重なりあう。郭基煥は、フッサール現象学を次のように明快に説明してくれる。

フッサールはこのように同一のものがさまざまに現れる仕方を＜現れ＞と呼んだ。

＜私＞はモノ自体を見ることができず、＜現れ＞を見ることしかできない。現象学とは、こうした現れが構造化され、何ものかについての経験が形成されるメカニズムを分析することを主要な課題とする［郭、2006：259］。

本稿は、このように説明する郭の現象学的社会学を支持する。つまり、経験が層化、構造化するメカニズムにこそ「見える」という現れがあり、まさに社会的リアリティが所在するところなのだ。だが、経験の層はたんに一面的なものではない。たしかに、疎外、物質化、「わたし」の非在性と関わるように、個が社会的な図式に拘束され規定されるという経験の層をとらえることは重要である。しかし、サイードが述べるようにイデオロギーや社会諸制度がどれほど完璧に機能しているように見えても、経験的世界を「カヴァーもコントロールもできない部分が、つねに存在するということだ」［Said、1993＝2001：85］。規定、拘束、図式化、モデル化、類型化などの物質化作用、惰性化作用は他者を完全に超越することはできず、つねに挫折する。つまり、社会諸制度の図式、形式に順応、規定、拘束されるかのように経験する「わたし」がいる一方で、その惰性性を感知する「わたし」の身体が実存するということ。すなわち、社会的な現象のリアリティを捉えるまなざしとは、社会的図式の規定性や拘束性と、未決・残余としての「わたし」という実存的身体との緊張状態やジレンマを＜現れ＞として「見える」ように記述していくことに他ならない。

さらに、李晟台を引用する郭の論旨から明確に述べるならば、疎外や物質化による個の規定性とは、捉えきれない何かを指し示すことであり、つねに＜否定の契機＞を産出することでもある。そしてこの否定の契機が、非在化する「わたし」、つまり「他者化」というリアリティの境界や、その境界が＜現れ＞となる社会的メカニズムを浮き彫りにする［郭、2006：141］。すなわち「それは私ではない」という否定が、逆説的に物質、図式、類型にリアリティを与えるのだ。

複雑、巧妙なポストコロニアル社会の研究で言うならば、これは捉えどころがなくなった植民者―被植民者、理性―野蛮性、暴力―非暴力などの植民地主義的惰性性の図式を「見える」ように記述することに他ならない。そして、あえてその二項を対決させ、二項対立という惰性性の密室を超えるために他者化の非対称性、不均衡性という境界のリアリティを浮上させることだ。そこに、ポストコロニアル社会のメカニズムを解読する鍵があるかもしれない。よって、植民地主義研究の一試論を標榜する本稿も、疎外の感知をめぐって実践的なものとならざるを得ない。

だが、問題が複雑に永遠回帰するように、注意を要する点がある。つまり、規制や拘束を感知する未決・残余的身体としての＜わたし＞、つまり実存としての＜わたし＞を諸形式、図式、制度と完全に切り離し「解放的なトポス」を確保して描くことの問題である。むしろ、それは

個と社会との関係に関するリアリティを捉えるうえでは弊害となってしまう。なぜなら<わたし>ですら<わたし>に到達することはできないのだ。ジャック・デリダが述べるように、私をまなざす<わたし>も結局は支配的言語において思惟し、自我に語りかけるしかない。すなわち「主体は、<自分が＝話すのを＝聞く>—分離不可能な系—」において自己と関わるのである［Derrida、1967＝1972：33］。<わたし>が自己に対して声を発するとき、すでに社会的諸形式の身体への書き込み（エクリチュール）は開始されているのである。

たしかにこのセミオクラシー（記号支配）的な時代は本質的に「神学的」であり、おそらく決して終わりはない。しかしながら、その密室（デリダが言う「閉域（クロチュール）」）において<わたし>が感知するところの物質化や疎外との緊張関係を素描し、この牙城を「見える」ようにしてやる方法も選択できるのだ［Derrida、1967＝1972：36］）。

3．おわりに—「植民地都市」沖縄を手がかりに—

何度も繰り返すが、本稿は沖縄社会を「植民地」、またその都市空間を「植民地都市」として捉え、ポストコロニアルな空間と文化装置のメカニズムを解読するため理論構築を試みる<足がかり>に位置づけている。それは、まさに本稿のキー概念であるところの「疎外」「物質化」の集合体、すなわち疎外態の<現れ>として支配の諸形式、図式の境界を明瞭にするからである。

しかし、植民地主義研究のみならず、空間論および空間権力論において、疎外の諸問題を一定の区画や地理的位置関係だけで記述するときに発生する深刻な問題には注意を要する。それは、植民地主義という権力作用や暴力の行使について沖縄あるいは沖縄都市という「空間」を記述しようとするとき、疎外態の層や像を一定の空間に押し込め、地理的な「空間そのもの」の密室でナラティヴ（物語性）を決めてかかる可能性を持ちあわせているという点である。それは、空間の密室性（閉域性）の元凶となる権力や暴力の行為主体へのまなざしをぼやけさせ、植民地的空間関係を脱構築する可能性を絶ってしまう。

たとえば、沖縄社会や沖縄の諸問題をめぐるとき、この類の記述行為は「軍事基地や戦争の爪痕に近づくほど、沖縄の植民地状況がよくみえる」「那覇に住んでいると沖縄の深刻な状況は見えてこない」「沖縄のなかにおける『中央－周辺』問題」「沖縄のなかの温度差」などのような、きわめて表層的で既知な考察に終始してしまう。これは、植民地支配の諸形式による「空間の政治化」および「政治の空間化」という、日常経験への効果として現れた諸言説である。だが、この類の言説構築はジャーナリズムや社会科学（とくにフィールドワークの王道をゆく社会諸科学）においても、記述行為の過程で頻繁に垣間見える権力図式である。つまり、問題となるのは、これらの記述的図式の書き込み（エクリチュール）がたんなる言説構築にと

どまらず、まさしく権力的な意味での言説空間の構築に加担してしまうことである。つまり、見えるもの、現れようとするものまでも、＜見えないもの＞、＜現れないもの＞にしてしまうという効力である。

先ほども紹介したバーガーの「暴露戦略」を繰り返すと、「社会」とは未だに発見されていない規則性、図式、諸様式の作動そのものの名称であり、それらの作動を「見える」ようにすることが社会学のまなざしである。よって植民地主義的支配の諸形式、諸図式は日常場面、発話、身体技法などの細部において発見可能であるし、たとえ那覇や東京で考察していようとも、むしろ帝国主義の文脈と併せて効果的に感知可能であるはずだ。沖縄に関する諸問題を「温度差論」、「『中央—周辺』図式」でまなざしをおくることは、植民地主義が敷設した密室的な空間権力関係を超えることはできないし、むしろその閉域性を強化する危険性を孕んでいる。

よって、植民地主義の日常にいる以上、東京であろうが那覇であろうが、どこであろうが、誰一人として植民地社会、植民地都市という意味での沖縄から逃走することはできない。筆者が、2003年に発生した自衛隊員（日本兵）の爆死事件を取り上げることに拘ってきた背景には、この事件が「沖縄社会そのものが軍事要塞であり、武器庫（弾薬庫）そのもの」であることを暴露したからだ。弾薬庫内であろうと、基地周辺の集落であろうと、そして県都であろうと、植民地主義が遂行される沖縄で、この「事件性」に関する記述が地理的区画に収納されることはあまり重要ではない。この日本兵による行為は、沖縄社会そのものが危険であるということを暴露した意味で「事件」なのだ［桃原、2005：54］。

だが、「爆死」などセンセーショナルな植民地主義的状況のみを指して「事件」と記述することは、やはり先ほどの「温度差論」と同様に社会学的には表層的で既知な考察でしかない。この「事件性」の更なる根源は、記号（象徴）支配的、文化支配的なところに求めなければならない。軍事的な暴力の偏在のみを指示して「植民地」と称する場合はたんなる他者化、空間化、閉域化的な記述でしかなく、植民地「主義」あるいはポストコロニアリズムの文脈における考察ではない。植民地「主義」研究ではない、たんなる植民地にかんする現地社会の研究は国民国家論や「中央—周辺論」の視角へと収斂していくのみであり、民主的に植民地主義を代替実行する主体としての帝国政府（日本政府）に対する弾劾のみに収束してしまう。

むしろ重要な点は、沖縄のグロテスクな状況を無効化し、自明なものへと昇華しようと働く文化的ポリティクスそのものである。ここでいうポリティクスとは、軍事基地から派生する事件そのものが「ノイズ」情報として違和や不和を滞留させず、日常の儀礼的態度や身体技法において消費の対象物質へと書き換えられてしまう権力作用である[6]。先ほどの日本兵も、沖国大のヘリの残骸も「事故」へと昇華し、掻き消されようとする。この昇華は、日常の経験と密やかな関係を結んでしまう、象徴（記号）の空間的操作によって他者化、物質化されるということでもある。

そして、筆者はこの日常経験の権力作用に関して、都市空間論の視点との接合を試みようと思う。なぜなら、都市とは根源的に象徴（記号）支配と物質化の作用が日常経験の層において閉域空間化した諸現象の総体だからである。また、植民地都市に限ってみても、そこは象徴支配的暴力行為、破壊行為が組織的に遂行される一方で、日常経験の層においてはこれらの野蛮性が物質化され、その物質の儀礼的消費において隠蔽・無効化（疎外）される効率性を擁している。

だが、この暴力性・野蛮性と日常経験における物質化が併存する植民地都市だからこそ、そこに「疎外」に対する違和・ノイズとしての未決領域が実存的身体へと集積され続ける可能性もあるのではないか。「コザ騒動」は二度と起こらないかもしれない。だが「疎外」を起点とした「騒動」への希望はつねに集積的に身体化していく。象徴暴力によって「疎外」されながらも、身体はつねに揺さぶられ、騒動を求めている。このような実践性を含めて、今後、ポストコロニアリズムの文脈における植民地都市の理論、および空間記号論の整理・検討が必要となるであろう。

注

1　「第147回シマ研究会」は沖縄国際大学南島文化研究所において2006年７月10日に開催され、筆者の報告に対するコメンテーターとして波平勇夫教授をむかえ執り行われた。

2　白川フリマに関する詳細は［桃原、2005］を参照のこと。

3　これらの理論的視座は、「差別」「被差別」という実存を＜アクティヴな我々関係＞という日常の社会関係の経験において概念化した郭基煥『差別と抵抗の現象学―在日朝鮮人の＜経験＞を基点に―』（2006年、神泉社）に負うところが大きい。郭は被差別という経験を次のように説明する。

　すなわち「＜アクティヴな我々関係＞が表象される際に、その表象上、自分が（客観的には誤って）排除されていることに（正当にも）気づき、それによって＜我々の眼＞に自分が見られているのを、しかしそれが自分ではない自分である以上、自分が＜構築される＞のを経験していること」［郭、2006：53］。

4　マルクス主義都市社会学（いわゆるニュー・アーバン・ソシオロジー）における都市空間論に関しては、その原型としてのカステル、その後、消費論に着目したスチュアート・ローやR. E. パールらの展開、そして哲学者アンリ・ルフェーヴルによる辛辣な批判的止揚までを概論的に紹介したものとして［吉原直樹、1994］が挙げられる。

5　暴力という本質に根ざした被植民者の直感に対して「二項対立主義だ」「本質主義だ」「排除の論理だ」と豪語する＜アンチ＞な態度の本質主義は、次のマルティン・ハイデッガーによるニーチェの「反対運動」に対する批判が明快に指摘している。

「ニーチェは彼自身の哲学を形而上学に対する—すなわち彼にとってはプラトニズムに対する—反対運動と解している。しかしたんなる反対運動であるかぎり、それはすべての《アンチ》とおなじく、それが立ち向かう相手の本質の中に必然的に執われている。形而上学に対するニーチェの反対運動は、それのたんなる裏返しとして形而上学の中に巻き込まれて出口を失っており、すなわち形而上学はみずから自己を自己の本質から遮断して、形而上学でありながら自己自身の本質をけっして思惟することができなくなっている。」[ハイデッガー、1961：13]

6　本稿において敢えて「事件」という言葉に拘ることに関しては、歴史事象に関する知と言語表現の権力関係、戦略・戦術の系譜、「ディスクールの体制」を解剖する姿勢にこだわった、ミシェル・フーコーの「事件」という命名権・翻訳権をめぐる闘争的議論を参照されたい［フーコー、1984：78－96］。また「ノイズ」としての情報を意味生産のプロセスとして捉える実践的方法論については、自己批判と異質性の受容に基づいて＜わたし＞（主体）と「他者」をめぐるメタ社会学的認識論を紹介した上野千鶴子を参照されたい［上野、1997：55－56］。なお、上記のフーコーと上野の実践性および認識論を参照し、沖国大ヘリ墜落事件および沖縄の植民地主義的状況について記述した試論として［桃原、2006：169－177］を参照されたい。

【参考文献】

カステル、マニュエル、1977年、「都市社会学における理論とイデオロギー」、C. G. ピックバンス編著『都市社会学—新しい理論的展望—』、恒星社厚生閣

Derrida, Jacques, 1967, De la grammatologie, Les editions de Minuit（＝1972、足立和浩　訳、『根源の彼方に—グラマトロジーについて—（上巻）』、現代思潮社

フーコー、ミッシェル、1984、『ミッシェル・フーコー 1926 - 1984—権力・知・歴史』、新評論

ハイデッガー、マルティン、1961、『ニーチェの言葉＜神は死せり＞』、理想社

郭基煥、2006、『差別と抵抗の現象学—在日朝鮮人の＜経験＞を基点に—』、神泉社

町村敬志＝西澤晃彦、2000、『都市の社会学—社会がかたちをあらわすとき—』、有斐閣

Said, Edward W., 1993, Culture and Imperialism, Alfred A. Knopf（＝1998、大橋洋一訳、『文化と帝国主義２』、みすず書房）

竹内芳郎、1978、『サルトルとマルクス主義』、紀伊国屋書店

桃原一彦、2005、「沖縄のポストコロニアル性と都市空間の再編—基地周辺市街地の空洞化とインフォーマル・セクター—」『沖縄国際大学社会文化研究』（第８巻第１号）、沖縄国際大

学社会文化学会
上野千鶴子、1997、「<わたし>のメタ社会学」、井上俊他編『現代社会の社会学』、岩波書店
鵜飼哲、1998、「ポストコロニアリズム—三つの問い—」、複数文化研究会編『<複数文化>のために—ポストコロニアリズムとクレオール性の現在—』
若林幹夫、1996、「空間・近代・都市—日本における<近代空間>の誕生—」、吉見俊哉編『都市の空間　都市の身体』、勁草書房
吉原直樹、1994、『都市空間の社会理論—ニュー・アーバン・ソシオロジーの射程—』、東京大学出版会